



ニュース
NEWS

レター
LETTER

No.28
2011年1月27日

年頭のご挨拶

“参勤交代”

理事長 飯尾 毅

新年明けましておめでとうございます。今年もどうかよろしくお願ひいたします。

私たちの『里山ネットワーク世屋』も平成15年12月の設立総会以来、8年目に入りました。

設立当初は理事の方々が交代で事業を担当し、行事を行ない、深町、奥両氏の尽力で『日本の里地・里山30』に選ばれたり、『セブンイレブンの基金』から助成金を獲得することもできました。

また、拠点である『ブータン』の改修には梅本、小林理事を中心に献身的な努力をしていただき、最少の費用で快適な空間を作っていただきました。19年の6月からは専従の事務局長として磯田さんを迎え、世屋地区の人たちとの交流、インターン生の受け入れ、香港からの研修生の受け入れなど人的交流を深めていただきました。



ぶーたん近況(1月22日撮影)

この7年間を振り返ってみますと、日本は政治、経済共に混迷の度合を深めており、特に政治家(首相)は将来の目標について言及することなく、借金したお金を政権維持のためにばらまくことしか考えていないように思えてなりません。

話は変わりますが、私は35年前の1976年に発行された『知の巨人』と呼ばれる立花隆さんの書いた『文明の逆説』(講談社)の一節がずーと気になっていました。

ハワイの博物館に“人類の墓”がたてられた。その墓碑銘にいわく、

「この種族は二万年前に生まれ、非常に繁栄したが、自らのつくりだした廃棄物と有害物と人口のために、2030年に滅びた」

『文明の逆説』に、この一節は雑誌『諸君』1970年8月号に掲載されたと書いてあります。40年以上も前のことです。経済成長に対する最初の警告書として有名なのは『ローマクラブ』の『成長の限界』で1972年の発行です。残念ながら地球環境を守るために決められたことは、フロンガスの削減だけです。

東大医学部の名誉教授の養老孟司さんは『いちばん大事なこと』(集英社新書)の中で“参勤交代”を提唱しています。1年に3か月は田舎で暮らす。そうしたら都会に戻って、会社勤めを再開する。都会で残り9か月を過ごす。これは全員に義務付けしないと意味がない。だから“参勤交代”なのである。

実現不可能ですが、これが可能になれば、日本が抱えている多くの問題が解決するように思います。

昨年12月中旬から『里山ネットワーク世屋』は結婚退職した磯田さんに代わり、永久さんが専従事務局長として頑張ってくださいことになりました。特別なことがない限り、火曜日と金曜日はブータンで仕事をさせていただくこととなります。

ところで、今年の税制改革で、認定NPO法人に対して寄付をしますと、寄付金の半分は減税になります。ただ、認定NPO法人になるには、年3000円以上の寄付を平均100人以上から集めることが条件のようです。『里山ネットワーク世屋』を維持し、活動を活性化するためにも認定NPO法人の資格をとることは必須と考えます。定款変更を含め、現在のメンバーが1人寄付をしていただく人を勧誘すれば目的が達成できそうなので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

■□活動報告□■

【交流】まちと里でつながろう会

と き:2010年11月27日(土) ところ:京都市
主 催:NPO 法人こどもアート、Café Millet

溝口 喜順 Mizoguti yosinobu



溝口喜順さん(中央)と美穂さん(右隣)

筐の出荷を行っている京都市内の和菓子屋さんからのご紹介で、静原町のCafé Milletさんと交流をはじめたことがきっかけとなり、11月27日(日)に開催された「まちと里でつながろう会(仮称)」(主催:NPO 法人こどもアート、Café Millet)に妻の美穂と2人でゲストとして参加しました。

地元の良さを知ってもらいたいということ、物作りを通じて、普段何気なく食べている食材の奥深さや食に対する関心を深めてもらいたいということ、里山の生活や農業に関心のある人や学生のインターンを受け入れることで、仲間作りや新規就農者として世屋地域と一緒に盛り立ててもらえるような人材の発掘につながるかもしれない、という都市農村交流に抱く期

待感もありました。

「丹後デザインプロジェクト」(NPO 法人地球デザインスクール)に参加の丹後の高校生によるガイドブック作成、副産物(へしこ作りで出る油)の利用方法、商品開発、アンテナショップ設置などの活動報告にはじまり、間人で活動している大学院生の棚田の再生や、子供たちとの交流「うかわくらぶ」についての紹介、世屋地区での暮らしぶりや活動紹介に、参加したNPOや大学関係者、府職員などの参加者が質問をしたりして、互いに理解を深めた後、ワークショップでこんにやく作りを体験してもらいました。

みんなで作ったこんにやく、溝口家の無農薬米や野菜、飯尾醸造の酢など世屋の食材を中心に、Café Milletさんがおいしい料理をつくってくれました。テーブルを囲むとさらに話がはずみ、開催時間2時間以上過ぎてなお話が尽きませんでした。

開催後に連絡を取り合っていた主催のNPO 法人こどもアート代表かとうさんが宮津に仕事で来られた際、お友達と一緒に松尾まで足を延ばしてもらいました。まちや仲間との交流の中で、自分たちに合った形と今後の方向性を探っています。

■□活動報告□■

【受け入れ】コンニャク作りを体験して

と き:2010年11月29日(月) ところ:ぶーたん
参加者:藤崎壮滋、深町加津枝、奥敬一、三好岩生、大学生2人
講 師:溝口喜順、美穂

藤崎 壮滋 Fujisaki Soji

(京都大学大学院地球環境学舎修士課程)

「もうええと思います」

講師の溝口さんの合図を受けて、私たちは玄関先の雪囲いの下に設置した竈でぐつぐつとゆで上げたコ

ンニャクを鍋からあげて、刺身のようにスライスしてわさび醤油をつけて口に放り込んだ。実にうまい。うま過ぎる。たった今出来たばかりのこの自家製コンニャクはみずみずしくも弾力があり、舌を潤し歯を楽しませ、するりと喉の奥に落ちていく。それはつきたて

のソバのようでもあり、モチのようでもあった。間違いなく、これまでの人生で食べたコンニャクの中で一番おいしいコンニャクだった。

思い起こせばコンニャク作りは春から始まっていた。春、溝口さんに指導を受けながら、NPO法人里山ネットワーク世屋で活動する先生方と一緒に休耕田を起こし畑にして、コンニャクイモの種イモを植えた。都市育ちの私なので、コンニャクイモという固形物を見たのはこれが初めてで、コンニャクはイモから作られるということも初めて知った。

収穫は10月末。これがなかなかの難儀な作業だった。スコップで掘ると大事なイモに傷をつけてしまう恐れがあるので、ゴム手袋をはめて素手で掘る。一日掘っていると日暮れごろには腰もしびれ、握力もなくなった。さらに子イモ探しが大変で、目を皿のようにして、手の指に感覚を集中させて掘る作業は、まるで川砂から砂金を探すようだった。やっと見つけたと思ったら、それは土がついた小石だったりする。コンニャクイモの皮の色は見事なまでに土色で、子イモと土がついた小石とは大きさも色も瓜二つなのだ。

そうして11月末、ようやくコンニャク作りだ。NPO法人里山ネットワーク世屋の呼びかけで、溝口さんご夫妻に指導をお願いしてコンニャク作り体験イベントをNPOの事務所、通称『ぶーたん』で行った。

手順は次の通り。まずコンニャクイモの皮をむき、サイコロ状に切ったものに水を加えてミキサーにかける。そうしてできあがった白濁の液体を鍋に入れ、約15分間火にかけて煮詰める。この時、鍋底が焦げ付かないように常にヘラでかき回していなければならないのだが、液体がだんだんと固化してくるので結構な腕力を要し、参加者が交代でかき回した。続いて鍋を火から上げ、人肌まで冷ます。これもかき混ぜて空気を送りこみながら冷ますので、力自慢の学生たちが(いやいや?)大活躍した。先生方はカメラに専念。冷めたら灰汁(アク)を素早く混ぜて、型板にのぼすと、数分で板コンニャクの形になった。灰汁は広葉樹のものが良いそうで、今回は桜から作



コンニャクイモの皮をむく



ゆでてミキサーにかけ煮る



煮詰めたものを冷ます



灰汁を混ぜ型板にのぼす



木ペラで一定の大きさに切り分け熱湯でゆでる



ゆで上がりを冷水で冷ます



出来たてを刺身で食す

った灰汁を用いた。そうしてゆで上げること十数分で、人生最高のコンニャクが出来上がった。

都市育ちの私にとって、コンニャク作りを通じて、ある時はあぜ道の野草を見ながら畑を起こし、ある時はすぐに成長してくる雑草を抜き、ある時は夕暮れを眺めながらイモを掘り、ある時は寒さに震えながら火を起こしと、世屋の1年の季節の移り変わりを体感できたのがとても幸せだった。でも何よりも、刺身コンニャクが舌の上ののってチュルッとしたときのあの感動が忘れられない。

■□会員のみなさまへ□■

【事務局長退任のご挨拶】

磯田 友美恵 Isoda Yumie

私、磯田有美恵は、昨年12月15日をもちまして、事務局長を退任させていただきました。就任中支えていただいた会員の皆様にお礼を伝えさせていただきたく寄稿させていただきます。

世屋での仕事を終えて1か月が経ちました。ぶーたん時間として身に付いたのか冬は少しのんびりと過ごして良いようなそんな感覚で過ごしております。しかし先日上世屋を訪ねてみると、「年明けからこんなに雪が積もったことはなかった…」とてるみさん。雪かきに忙しい村の様子をみて気付かされることがありました。ぶーたんにいる時は村においていただいている人間のように当たり前になっていたのですが、世屋を客観的にみる立場「そとの人間」になったのだということです。それを改めて感じて寂しい気持ちになったと同時に「新たなスタートなんだなあ～」と実感しました。

団体設立4年目から7年目にわたって関わらせていただき、本当にいろんなことがありました。ぶーたんは進化しました。当初1階は2部屋しか使えない状態でした。トイレもきれいになって、シャワーも使えるようになりました。備品も増えました。夏は涼しく、冬は雪囲いで隙間風を防ぐ民家の構造、家は使われていきいきするのだということを身をもって感じました。世屋をとりまく状況も変化しまし

た。国定公園に指定され、宮津市によるエコツーリズムや京都府による命の里事業など行政の介入も大きくなりました。行政の力を次につながる動きへと生かせればと考えさせられました。会員の活動があつてのぶーたんです。会員の方が求めていることは何なのか、世屋にとって何が必要なのか…ネットワーク組織という細々とでも確固たる団体の在り方を模索しながら進んできた3年半でした。

飯尾理事長はじめ役員の皆様、会員の方々、世屋に関わる多くの方に支えていただきました。経験もない未熟な私に事務局を任せていただき、たくさんのごことを勉強させていただきました。勢いだけの若造で、ぶつかってばかりの頼りない事務局長でしたが、「そこにいるだけで見えてくるものがある」という持論のもと、ぶーたんで過ごした時間はかけがいのないものです。丹後を離れ「そとの人間」になってしまいましたが、ぶーたんでの経験を生かして世屋の人により近い「よそ者」として新たな関わりを続けていきたいと思っています。一会員として皆様とは世屋好きつながりを続けていければと思いますので、今後もご指導のほどよろしくお願い致します。事務局はベテランの永久さんにバトンタッチをさせていただきました。新たな風となつていただけることを期待しています。

相変わらず財政厳しいぶーたんですが、「世屋にぶーたんありき」の存在となるよう願いを込めて、退任のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

.....《事務局からのお知らせ》.....

■12月に事務局を引き継いで以来、出勤体制をいろいろと試してみましたが、2月からは毎週火曜日と金曜日をぶーたん出勤日、ほかに1日をフレキシブルな勤務日とさせていただきたいと思っております。ただし諸般の事情で変更になる場合もあると思っておりますので、よろしくお願いいた

します。
■新年はいきなり的大雪で始まりました。一人暮らしのお年寄りの家には、行政から雪かきの応援が入っています。1面写真のように、ぶーたんも早々と雪に埋もれました。雪かきボランティア大歓迎です。(永久徹)

NEWS LETTER ニュースレター No.28
発行：NPO 法人里山ネットワーク世屋 理事長 飯尾毅
〒626-0227 京都府宮津市宇上世屋 560-1 TEL/FAX0772-47-3540 bhutan@mx.nkansai.ne.jp
編集：永久徹 印刷協力：(株)飯尾醸造 発送：事務局ぶーたん